

? 東南アジア 8 インドネシア (その二) 歌謡界の二人のスーパースター

著者	三平 則夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	90
雑誌名	「あそび」と「くらし」 : 第三世界の娯楽産業
ページ	55-60
発行年	1994
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017783

8 インドネシア（その二）

歌謡界の二人のスーパースター

三平則夫

音楽の宝庫

インドネシア

インドネシアの芸能ではバリの踊りやガムラン音楽が日本人にも人気だが、インドネシアは音楽の宝庫でもある。そのジャンルは非常に多様で、全国レベルのものがあれば、地方レベルのものも多数を数える。むろん、私のような素人にはそのそれぞれをあげつらうことはできないが、どこの国にも共通するような若者向きポップス、十六世紀にポルトガル人の音楽を真似て生まれたクロンチョン、インド音楽の影響下でスマトラとジャワのマラッカ海峡・ジャワ海沿いの地に広まったムラユ、これとロックを融合させたダンドゥット、西洋歌曲をそのままインドネシア化したセリオサ、アラビアンナイト物語などを上演して回る旅劇団が劇中に用いたスタンブル（クロンチョンの変形）、クロンチョンから派生したランガム、ジャワやバリの王宮に発達したガムラン、そして多数の各種

族・各地独特の音楽、ほんとうにさまざまだ。

これらは老若のインドネシア人の余暇の良き友であるが、私も都合九年ほどインドネシアに滞在するうちに、すっかりクロンチョン・ファンになってしまった。インドネシア人は若い時は欧米やインドネシアンのポップスを聞かすが、年をとるとクロンチョンに転向するという。私は実年齢より老けているので、転向も一般のインドネシア人よりだいぶ早かったように思う。夕暮れ、クロンチョンを聞きながらジャワのコーヒを飲み、クレテク（丁字添加煙草）をくゆらせれば、東京のわが勤務先のことなどすっかり忘れて、気分はジャワの年金生活者。

クロンチョンは毎年その歌唱コンテストが行われるほど盛んで、言ってみれば格式が高い。伴奏するのはオルケス・クロンチョン（OK）と呼ばれる小編成バンドで、クロンチョン（ほぼウクレレと同様の楽器、通常ウクレレで代用。演奏するとクロン、チョン、クロン、チョンと聞こえることからその名が付いた）、ギター、チェロ、ピアノで編成されるのが最も正統的なものであるが、スリンという横笛が付くことが多く、クラリネット、サクソフォンも加わることがある。

人気抜群のヘティ

優れたクロンチョン歌手が多いなかでも女性歌手ワルジナ（一九四三―）はその頂点に君臨する。その澄んだ張りのある声は聞く者の心にまっすぐに突き刺さって比類のない説得力をもつ。他方、最もレコーディングの多い歌手は断然ヘテ

イ・クス・エンダン（一九五七）である。

ヘティもまた優れた女性歌手で、ジャンルを選ばず、クロンチョンはもとより、ポップスでもダンドウットでもさまざまな地方の民謡でも何でも巧みに歌ってしまう。インドネシアの美空ひばり（？）とでも言おうか。国内外の歌謡コンテストで多くの賞をさらひ、その人気は国境を越え、今や東南アジアのトップシンガーである。来日公演経験もすでに数回を数え、一九九四年には日本市場向けに録音されたCD、テープがリリースされる。

私が初めて聴いたヘティの歌には鮮明な記憶がある。一九七七年、ヘティがシンガーソングライターのアジ・バンディとデュエットで歌ったアジ作のポップス「平和な、されど不毛な」がその年のインドネシアのベスト・ポップスに選ばれた。ジャカルタの町はひとしきりこの歌で溢れ、私もこの曲が気に入った。この歌は同年の秋、インドネシアを代表して東京の世界歌謡祭に参加し、作曲賞を受賞する。ヘティ等の歌唱も長い拍手で讃えられたという。

ところで、この年の五月、国会議員の選挙が行われたが、その選挙の際に軍が与党に相当肩入れしたらしい。それが原因で学生が政府批判を始めた。当時学生の政治活動は禁止されていたのだが、抗議行動の矛先は汚職問題、そしてスハルト大統領三選反対にまでいたっていった。一九七八年一月、学生の抗議行動は頂点に達し、政府は学生指導者を拘束し、一部新聞・雑誌を発刊一時停止処分するとともに、それを扇動したとする知識人を逮捕し

た。「平和な、されど不毛な」はそのタイトルから察せられるように、経済開発の初期の熱気が冷め、気が付けばさまざま不正がはびこっていたというこの時代の雰囲気を映し、この学生運動にぴったりのBGMの役割を果たしたのである。ちょうど、日本の六〇年代学生運動に「アカシアの雨がやむとき」があったように。しかし、インドネシアにおける大がかりな学生運動はこの時をもって息の根を止められてしまう。「平和な、……」は学生運動の一時的な死への挽歌であったと言ったほうがよいのかもしれない。

むろん、このことはヘティ自身が政府に批判的かどうかとはまったく関係がない。ヘティは政府からもその人気に目を付けられ、クロンチョン仕立ての建国五原則宣伝歌を唄わされたり、一九九三年十月の与党ゴルカルの総会の際にはアトラクシオンで唄うようにと、目下長期滞在中のクアラランブルへ情報大臣から直々に呼び出しをかけられたりしている。

庶民の若者に人気

のロマ・イラマ

女性歌手のスーパースター、ヘティに対して男性歌手スーパースターはダンドウットのロマ・イラマ（一九四七）である。ファン層は庶民の若者たちで、大きなスポーツスタジアムを満員にする実力を持つ。彼がヘビメタ・ロッカー風の出で立ちでステージに上がれば、聴衆は熱狂して踊りまくる。自ら主演して映画を作れば興行成績にまず心配がない。カセットテープの売上げや彼の主演した映画の動員数から大まかに推計して、彼のファン総数は一五〇〇万人は下らないとする説すらある。



安定した売上げを保つスターのカセットテープ

彼のもともとの名はリズムを意味するイラマである。父親が「イラマ・バル（新しいリズム）」という名のスンダ劇団（スンダは西部ジャワの種族）の公演を見て帰宅したところで彼が生まれたのでイラマと名づけたのだという。まさに、革新的な大衆音楽の申し子にふさわしい

エピソードである。幼児期の彼の普段の呼び名はオマ（Oma）であったが、一九七五年に彼がメッカ巡礼を終えてハジになったところで、父から受け継いだ伝統社会の貴族の称号ラデンの頭文字Rとハジの頭文字Hをオマの前に付けてロマ（Rhoma）・イラマと名乗るようになった。

小学生時代から歌好きで、よく人前で歌を唄っていた。敬虔なムスリムであるロマは、高校を卒業して東部ジャワの回教塾へ入ろうかと迷いつつ、しばらく中部ジャワのソロの町で流しを経験した。結局、回教塾に入ることなくインドネシアがスカルノ体制からスハルト体制へ移った頃にロマも歌手活動を本格化させるのであ

る。

ロマが創始者であるダンドウットは、ロマが既存のムラユのメロディーにロックを融合させたもので、その結果、彼の曲には、ダン、ドウット、ダン、ドウットというビートが特徴的となったところから、この名で呼ばれるようになった。ただ、この呼び名は彼の音楽に批判的な人々が付けた名で、ロマ自身この呼称は好きではない、とコメントしているが、これはすつかり市民権を得てしまった。

「政治」とスターたち

そして、彼の歌の特徴はその歌詞にイスラムの教えが色濃く反映され、その立場からしばしば鋭い政府批判が飛び出すことである。自然に、回教系の野党開発統一党に近い存在であったが、彼の影響力の大きいことを懸念した政府からは一九八〇年代に入って公演を規制されるようになった。強い性格の彼は自らが譲つての妥協の道を嫌い、一時期、公演をせずに過ごし、やがて、政府の方からの歩み寄りがあつて公演が再開される。九二年六月の国会総選挙ではジャカルタ特別区知事がダンドウット・ファンだと称して若者たちになじり寄る場面もあり、失笑を買った。

ヘティにしても、ロマにしても、開発独裁段階の国でスーパースターになると政治にも無関係ではられないようだ。